



- ・巻頭言……………1
- ・研究所活動報告……………2

- ・豆手帖④⑥……………3
- ・新刊案内等……………4



水辺の暮らしと環境

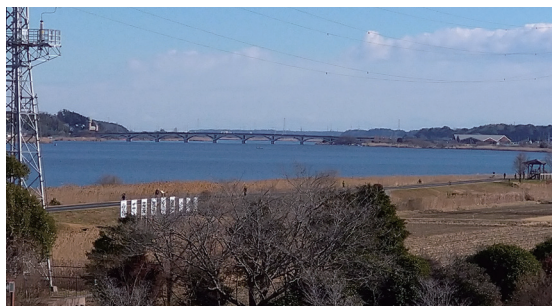
社会イノベーション学部教授 古川 良治

千葉県北部、利根川の近くに手賀沼がある。沼沿いには手賀沼ふれあいラインと呼ばれるバイパスが通り、柏市から我孫子市に向かう道中では、天気良ければ水面に反射する陽光を感じながらドライブすることもできる。周囲には田園風景が広がり、ジョギングや自転車コースとして楽しんでいる人も多く見かける。

視覚的にはとても印象の良い水辺であるが、手賀沼は1974年から2000年まで27年間連続で湖沼水質汚濁日本一となっていた。しかしながら、初めから水質が悪かったわけではない。元々は海跡湖であったところに、江戸時代になると利根川の氾濫に対する備えや、江戸への食糧提供のために人の手が加えられたが、その当時は水質も良く、鰻や鯉などの魚介類に恵まれ漁も盛んであったようである。大正時代には、志賀直哉や武者小路実篤の別荘もあり白樺派ゆかりの地となった。昭和になっても豊かな水辺の風景が広がっていたようで、1952(昭和27)年から1955(昭和30)年まで柏町営水泳場が開かれ、記録に残る写真を見ると夏の風物詩の一つとなっていたようである。

しかし、その後は日本の高度経済成長に伴い周辺市町村の都市化が進み、生活排水や産業排水が流れ込んだため、水質汚濁と富栄養化が急速に進んだ。その結果、植物プランクトンが増殖し、夏にはアオコが異常発生しペンキを流したようになっていた。

水質ワースト1を返上できたのは、2000年に北千葉導水路が完成してからのことである。北千葉導水路は、利根川と江戸川を結び、近辺の内水排除、江戸川への都市用水提供、手賀沼の水質浄化を目的として作



られた水路である。利根川から取り込まれた水は、手賀沼の西端付近にある北千葉第二機場まで送られ、手賀沼に放水されるものと、江戸川に送水するものとに分けられることになる。手賀沼は西から東に流れているので、上流に利根川からの水が流し込まれることで、汚れた水を押し流しているということになる。このほかにも、近隣の自治体では公共下水道の整備を進めたり、住民への情報提供を通じて環境への意識を高める努力を行っているが、水質が清浄になったというにはまだ道のりは遠いようである。

話は変わるが、手賀沼では毎年8月に花火大会が催される。第1回は、1987年に利根川治水100周年を記念して開催され、途中コロナ禍により中断があったものの、2024年も8月3日に第32回大会が無事開催された。柏会場と我孫子会場に分かれ、都合3か所から13,500発の花火が打ち上げられるが、水中花火もこの大会の目玉となっている。手賀沼ふれあいライン近くまで行くと、尺玉の破裂する音圧を体全体で感じる事ができるほか、水面から半球状に広がる輝きを見られるが、一方では、水質の悪い手賀沼で水中花火を行って大丈夫なのか?と心配にもなる。夏の風物詩として既に定着している花火大会であるが、今後は手賀沼の浄化が進み、水質を気にすることなく水中花火も楽しめるようになることを願う。(所員)

研究所活動報告

◆研究員研究活動報告

『嘉永文化』の研究
小沢詠美子

「嘉永文化」とは、天保改革が事実上挫折した弘化期から、嘉永期をへて、開国による西洋文明の影響を大きく受ける以前の安政期に至る時期に展開した文化である(1844~1859)。西山松之助先生、吉原健一郎先生がご研究されていたテーマでもある。

さて、江戸における「嘉永文化」は、情報文化、園芸文化、手わざ文化などがその特徴といえる。国立国会図書館蔵「麗斎叢書」、国立公文書館蔵「弘化雜記」「嘉永雜記」、東京都公文書館蔵「撰要永久録」などの史料からは、当時の社会背景や、嘉永文化のさまざまな側面を知ることができる。たとえば、「嘉永雜記」に「頭字横によむべし」として次のような落書が記されている。

今度新吉原江戸町
之尾張屋彦太郎抱の遊女
花の井三ツ子をうみ
しは誠に珍しき事二（候脱力）へ
ハ御奉行所へ御訴申上候所御
見届之上身分御糺し

なされ名を一之助二之助三之助ト御付被遊
うふぎ一重ツ、被下置候
鹿末無之様ニいたし相そ
だて可申旨被仰付候

つまり、「頭字」を読むと「今之花しハ見なう鹿だ」となり、今の話はみな嘘だ、というオチになるのである。この落書は、「麗斎叢書」にも記録されている。同書では子供の名が「太郎次郎三郎」となっているなど、文言に若干の変異は見られるものの、「頭字」は「今之花し者（は）見名うそだ」というオチに変わりはない。しかし、肝心な「頭字横によむべし」という註が書かれていないので、オチに気づくことは難しい。いずれにせよ、当時こうした落書が作られ、市中に流布していたことがわかる。

この時期は、銭不足による不景気、外国船の来航、大水害・大地震・大風水害などさまざまな内憂外患に見舞われていた時期である。その一方で、江戸で暮らす人々は落書を楽しむ余裕を持ち合わせていたことは、充分留意すべきことであろう。

今後もこのような事例を集め、分析作業を進めていく所存である。（研究員）

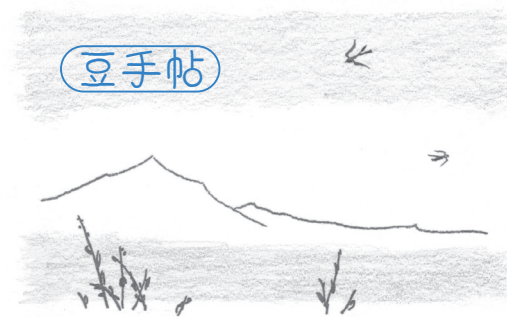
アイヌ民族の「現在」を展示すること
関口由彦

これまでこのテーマに取り組む中で、アイヌ民族の「現在」とは単に時系列上の「近現代」という時代区分を意味するのではなく、今なお払拭しきれない植民地主義的な語り（オリエンタリズム的表象）によって捉えられない日常的なものに向き合うことが求められていると論じてきた。このことは、「現在」をいかに表象するかという、描く（展示する）内容についての議論であり、私はこのような観点から、これまでのフィールドワーク経験に依拠して考察を重ねてきた。私が勤務する国立アイヌ民族博物館の常設展においては、主に「私たちの歴史」と「私たちのしごと」というセクションでアイヌ民族の「現在」を重点的に扱っている。

しかし、この数年間、私が所属する展示企画室という部署で常設展及び企画展の制作に直接的に関わり、展示制作業者や美術専門の輸送業者と仕事をする経験が深化していくことで、研究の視点にある変化が生じた。すなわち、どのようなファクターとアクターの関わりの中から展示がつくり

出されるのかといった問いが眼前に立ち現われたのである。特に私が担当する企画展庶務業務においては、展示造作、資料輸送、展示作業の業務発注のための仕様書を作成し、資料借用の申請を行う。また、展示企画室では、館内の展示に関する決定機関である展示企画委員会や、外部有識者の意見を聴取する展示検討ワーキング会議といった会議を開催する。また、そもそも、国立アイヌ民族博物館は、文化庁がとりまとめた「国立アイヌ民族博物館展示計画」（2016年）等の文書に従い、今後のアイヌ政策について検討した「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書」（2009年）等を参照しながら活動を展開している。そして、言うまでもなく、アイヌ民族をはじめとする様々な民族的出自をもつ研究員・学芸員が日々の業務を行っている。

要するに、現在のアイヌ民族を取り巻く様々なファクターや、多様な関心事をもつ人々の複雑な絡まり合いの中で展示はつくられている。展示内容の現在性もさることながら、展示がつけられていくプロセスの現在性にも目を向けた研究をはじめている。（研究員）



本は人生とともに

陳 力 衛

の引っ越しのため捨てがたき本もこのような形でこちらは引き受けている。

さらに蔵書の増加に輪にかけたのは、大学の廃棄本がどんどん入るようになった。院生時代に買えなかった1651頁もある小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』などの単行本はもちろん、『日本経済叢書』『内藤湖南全集』『安藤昌益全集』、最近『伝教大師全集』まで手に入れて嬉しい限りである。民俗研究所からも沖縄方言関係の図書を6箱研究室に運んだ。

そして拾う本もとても多い。同じマンションで隣家が捨てた本、ゴミとして出された本、さらには通勤途中にある家の前に「自由にとってください」と張り紙をつけた本などである。新書版の『漱石全集』（三十四巻）、『日本現代文学全集』（百十巻、講談社）はこうして書棚に収まった。

なぜそれほどまでに本を集めているのか、一つは「書到用時方覚少（書物をいざ使いたすと、その足りなさに気づく）」という昔からの言い伝えがある。もう一つは大学院時代、平山久雄先生から京大の清水茂先生の話として、「文字になっているものならすべて研究対象だ」というのを聞いていたからだ。さまざまな資料から異なる様相を丁寧に記述することが言語研究にとって重要な第一歩である。

さて、これほどたくさん集めた本であるが、定年退職したら、まず一番困るのは置き場所であろう。こちらもご多分に漏れず、昨年三月からこの悩みが時々襲ってくる。研究室に入る度に両側の書棚を見てその行方を心配したりする。大学の図書館には引き取ってもらえないので、いっそのこと同じ悩みの人に声をかけて田舎に新たな図書室を作り共同利用するのもよい。亡くなられた科学史家の佐々木力先生の蔵書も併せると相当な規模になりそうだ。

日課のように、出勤した際、まず図書館の玄関内に処分本の棚が置いてあるかどうかを確認し、あれば好きなものをもっていく。なければ素通りするだけである。一日の幸せは図書館から始まるのだ。（所員）

◆◆新刊紹介◆◆

田中宣一 著

『エビス神信仰の研究』

2024 年 10 月 岩田書院発行 A 5 判 422 頁

価格 9,400 円＋税 ISBN978-4-86602-175-1

本書は長年にわたって当研究所の事業に貢献された、本学文芸学部名誉教授の田中宣一先生が数十年来取り組まれてきた、エビス神の信仰に関する研究をまとめた成果である。

序跋を除くと本書は二部構成となっており、第一部はエビス神の成立や性格、その信仰の伝播など、エビス神信仰の全体像について考察したものである。第二部は近現代日本におけるエビス神信仰の実像を、個別地域での民俗調査によって提示したものとなっている。

第一部の前半では、文献におけるエビス神の登場とその伝播が述べられている。この神への信仰は兵庫県の廣田神社の摂末社であり、現在「えべっさん」や「開門神事」で知られる西宮神社がエビス神信仰の全国的な拡大に寄与したが、その背景には同社が江戸時代前期に幕府からエビス神像札の独占的頒布権を認可されたことが指摘されている。これにより、エビス神の信仰が沖縄を除く全国各地域に分布することになった。

第一部後半ではエビス神信仰を、海神・漁業神、商業神、農業神としての信仰に大別して分析されている。江戸時代前中期に大阪湾以西の沿岸部を中心に漁業神として信仰されていたエビス神が、大都市においては商業神となり、農村部においては在地の農業神と習合していくように、そ

の信仰拡大に伴いエビス神に託する願いも人びとの暮らしに適合した姿に変容していく様が描きだされている。

以上のようなエビス神信仰の全体像が主として『西宮神社御社用日記』など諸文献の博搜によって裏付けられているのに対し、第二部では第一部で大別された漁業地域、商業地域、農業地域におけるエビス神信仰の実態を、松本市や屋久島などにおける民俗調査から提示している。さらにエビス神が、時に目や耳、身体に不自由を持つ神として描かれることや、大黒とペアで祀られるのは本来エビス神が夫婦一对の神としてイメージされていたことが、日本における農業神の特徴と関連づけながら分析されている。

本書誕生にはコロナ禍によって外出が制限されたことが直接的な契機となったと語られているが、エビス神への関心は田中先生が年中行事の研究に取り組んでおられた時期にまでさかのぼるため、本書は 30 年以上の課題に対するひとつの回答となっている。なお、2003 年に作成された『えびすのせかい』は、先生が大学院生と協力して膨大な量の民俗誌等からエビス神信仰の事例をまとめた成果であり、本書とともにエビス神信仰を民俗学的に理解する際の基礎的資料となっていることを付記しておきたい。（今野大輔）

編集後記

民研ニュース 147 号をお送りします。巻頭言には古川良治所員から「水辺の暮らしと環境」との題名でご寄稿をいただきました。手賀沼の変化とその背景、さらに近況について、手賀沼の風景が思い浮かぶ情趣に富む文章をいただきました。研究所に所属する研究員の活動については、小沢詠美子研究員から嘉永文化に関する自身の著作について、関口由彦研究員からは現在所属している国立アイヌ民

族博物館での活動について、報告をいただきました。研究所の多様な活動の一端がうかがえるかと思います。豆手帖では陳力衛所員から、ご自身の蔵書の成り立ちと本に対する思いについて、とても共感できる文章をいただきました。最後に田中宣一名誉教授の近著『エビス神信仰の研究』について、今野大輔研究員に紹介をしていただきました。今回も、ご寄稿いただいた皆さまに感謝の意を表したいと思います。

民俗学研究所ニュース No. 147



令和 7 年 1 月 25 日発行

編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事 小澤 正人

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

TEL：03-3482-9097・9098 Fax：03-3482-7763

mail：minken@seijo.ac.jp